

ぐろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成十五年七月一日発刊（毎月一回一日発行）  
第十巻第二号（通巻第二二二号）

鈴



ぐろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第111号

7. 2003

さいづちあたま  
才槌頭

品川鈴子

有事法とかく祭に武者揃ひ

祭馬競走慣れの勇み脚

才槌頭祭烏帽子の据わりよし

奥美濃の谿湯に蜘蛛の巣の暖簾



句をひねる谿湯に簾戸の廁あり

汗しとど座席をめぐる旅役者

どよめけり汗の女形の流し目に

見覚えは楠若葉のみ様変わり

四阿<sup>あずまや</sup>に二派の吟行青時雨

おほかたは描きし柳眉京の梅雨



## 玉 鈴

愛媛 鈴木てるみ

春潮の大洋観つゝ朝餉とる  
船旅のデッキにてみるオリオン座  
穂高小屋氷柱の戸口砕き入る  
顔程の牡丹咲かせし浜離宮  
浜離宮呈茶の席に鴨の来る

大阪 鈴木浩子

再建の堂の槌音櫓芽吹く  
啓蟄の古道の木切れ文と見ゆ  
いつもより煮物うす味百千鳥  
誓子の忌行き摺りの児に目が笑ふ  
投票の帰りは花に足のぼす

香川 陶山 泰子

マスクして瞳の熱く語り出す  
梅の花蜜吸うように嗅ぎにけり  
緞帳のゆっくり上がる春の宵  
葱の花拳は木偶の膝頭  
春の雷鬼に変わりし木偶の面

## 吟

香川 瀬口ゆみ子

鑑真の眼裏しかと春日あり  
おとなしく犬洗われて春の虹  
鳥の目になりて天守に花見する  
城壁を舞い上りくる落花あり  
白船の航跡長く春がすみ

愛媛 武司 琴子

賞状を丸め望遠山笑ふ  
控え目に知らず病状夕霞  
耕して疲れを腰に三日溜め  
耳鼻科医も夫も老いたり春の雲  
駆くる児の皆口開けて花吹雪

大阪 竹下 昭子

彪犬の鼻ぬれぬれと草若葉  
花ゆれて雨足強くなる気配  
掴まんとすれどふわりと落花かな  
少女らの縋れて追いし花吹雪  
春の野にモンローウオークむつきの児

兵庫 田中敏文

讃岐富士花の裳裾をひろげをり  
インフオラーターチューリップの花街飾る  
青芝に寝そべり未来語り合う  
青芝に植替の苗彩別に  
ボール蹴る児の歓声の子供の日

兵庫 田中倫代

四月七日アトム第九に目を覚す  
春雷のおさまるまでの逢瀬かな  
街騒の直哉旧居の春障子  
天窓のあかり取り込む桜草  
あはせたきひとあるといふ春の宵

大阪 谷 泰子

対岸は遠し春雪まとひつき  
自転車の視界遮る春の雪  
彼岸会に戦のニュース飛び込めり  
鶯を追ひ払ひたりシヨベルカー  
豪邸の取り壊されて月朧

愛媛 筒井圭子朗

雪解ダム水位が徐々に回復す  
分校教師山焼の火付け役を買ふ  
けたたまし雉子が地震を感知して  
孕鯉群に遅れて回遊す  
花吹雪く墓地に回忌の塔婆立つ

兵庫 内藤 三男

花冷えの法経五番講義室  
錠前の朽ちし土蔵や丁字咲く  
小次郎の剣の暗喩か燕舞ふ  
矢印に進む健診花の昼  
季重ねも鷹揚にみて春句会

大阪 中島 霞

乾坤に心遊ばせ畑を打つ  
耕しの手を止め振りぬ園児らへ  
花辛夷ひねもす瀬音ひびきけり  
駈け出して校門くぐる入学児  
寺領田へ小さき石橋春闌くる

# 薬草歳時記

(一一〇) スイカズラ・忍冬(ニンドウ)

## 菅原由紀

蚊の声す忍冬の花の散るたびに

与謝 蕪村

出土した法隆寺の軒瓦を「忍冬唐草文瓦」と言う。この忍冬がスイカズラのこと、蔓のからみから唐草文様としてデザイン化されたもの。

正倉院の植物文様の中には、たくさん唐草文様がある。ぶどう、さくら、蓮華等の種々の唐草文様があり、その中でエジプトからグレコローマン美術に発展したパルメット唐草文様のことを、日本では忍冬唐草と呼んでいた。

三鷹市の中近東センターやICU(国際基督教大学)の湯浅記念館では、いろいろな唐草文様を見ることが出来る。

スイカズラは中国、韓国、日本の各地の山野に自生する常緑のつる性の植物。冬にも枯れないことから忍冬と名前がついた。

花は白、またはわずかに紫紅色であるが、時間の経過とともに黄色に変化。その白い花と黄色い花が並んで咲くこともあるので、その様子から金銀花キンギンカとも言われる。

花、茎、葉ともに薬用に使用する。

別名も多い。雙花ソウカ、忍冬花、鴛鴦花ユウヤウカ、忍冬藤等々。

生薬として薬用を使用する時、花を乾燥したものを金銀花、茎葉を乾燥したものを忍冬といい、花期の6月に採集、調製。

花は甘い香りを持っていて、それは夜に強く香る。

蔓草で花の奥に蜜がある。

昔、子供達はその蜜を吸っていたことから、スイカズラという名前になった。

成分 花はルテオニン、イノシトール、サポニン、タンニンを含む。他にロニセリンを含む。

効能 抗菌作用、化膿や下痢止め。

解毒、解熱、利尿薬として用いる。

処方 八味湯下方など。

近縁種のウゲイスカズラの実は食用になる。

植物としてのスイカズラを追っているうちに、日本や中近東の文様や器、絵画の中の唐草文様に心惹かれていった。歴史と文化のある不思議な植物である。

参考文献 「東洋医学漢方解説」 学研

「薬用植物」 廣川書店

「週刊朝日百科世界の美術」朝日新聞社  
著者略歴 神戸薬科大学卒

スイカズラ (ニンドウ) [ スイカズラ属 ] (すいかずら科)

*Lonicera japonica* Thunb. 忍冬

薬用部分：葉、花蕾

須賀  
悦子  
画



忍冬に眼薬を売る裏家かな 正岡 子規

忍冬のだらだら花や法師蟬 石田 波郷

忍冬の花折りもちてほの暗し 後藤 夜半

忍冬咲く故蜂ゆえはちにさされたる 高野 素十

すひかづらたまの揚羽のながくゐず 中村 汀女

金銀花妻子のためには酬はれたし 中村 草田男

忍冬おとめ乙女ら森を恋ひ来り 堀口 星眠

牛うまれ牧をいろどる金銀花 大島 民郎

すひかづら鴉子連れとなりしかな 斉藤 夏風

忍冬からむ山家に置薬 鈴木 愛子

くろつけ

# 鈴の奏

品川鈴子選

何故に旅する吾ぞ雲の峰 埼玉 小田 知人

見知らぬ地一人歩けば油蟬  
足もつれ若き日思う山登り  
道をしへ不安のつる宿搜し  
初燕おまえは何を見てきたか 兵庫 所 薫子

すみれ草重たい荷物降ろしたし  
ミモザ吹くケーキシヨップのドア押せば  
花嵐からだの中を吹き荒れて  
かるやかに春衣まといて妹召天 兵庫 谷 楓

彼岸前立つ妹にみぞれ雨  
花未だし桜並木の霊柩車  
春寒しパイ皮のごともろき白骨 大阪 角谷美恵子

象のよに洗濯機鳴く万愚節  
鮎子の大鍋揺するいかり肩  
屋根替への職人あいさつ河内弁  
花疲れ風呂が沸いたと電子音 愛媛 石積知恵子

漱石忌読書の夫は猫背なる  
歩きけり菜の花畑つきるまで  
言ひ訳の通らぬ二人花の冷  
清水の舞台花人溢れたる 大阪 奥田 妙子

清水の舞台も光る花の雨  
眼裏にドイツの春が焼き付きて  
門前のゴミみな集め春一番  
何盛らむ春三日月の金の皿 埼玉 岡田 章子

春日漏る粉引の酒器の淡光り  
風生るや遡りゆく花筏  
桜散る砂漠の戦終局へ  
旅先のスタンプ並べ春惜む 兵庫 近藤 貞子

逃水の大地に鏡置くごとし  
狂言師くずさざる膝蕨餅  
日輪をそれぞれ頒つ百千鳥  
大屋根に煙出しあり春の雲 兵庫 四葉 允子

出書院の細工モダンに春障子

花冷えの文学館への石畳  
櫺子窓残る通りに花海棠

愛媛

佐々木 栄

かあさんと逝きし子の声北風吹く  
逝きし子は切符買えしか入彼岸  
波音は子守り唄なり浜大根

兵庫

武田 正子

犬ふぐり牛の寝そべるあたりに  
バス降りて花菜の匂ひとぞ思ふ  
記念樹の少し遅れて芽吹きたり

愛媛

年森 恭子

ミモザ咲き教会の窓たまご色  
舗装路のでで虫庭に連れかえる  
夜桜にあらぬ二人を見かけたり  
この先は花と風しか通れない  
花疲れそして家業と厨事

神奈川

山崎 辰見

無住寺の瓦とばして春疾風  
吹かれ飛ぶ新聞濡らし春の雨  
袴とればみいんな同じくしんぼ  
白黒の仔うさぎ売らる青空市  
乗客と花びらどっと山の駅  
風の中水車小屋まで懐手

兵庫

藤本つた恵

嫌な事聞こえぬふりし冬帽子

兵庫

入江 和子

葦草見つけて止る乳母車

春暑し人の背越しの魁夷展

息つめて聞く鶯の声短か

満開の花が口数多くする

春は先づ園芸店の店先に

トロン

恩塚 典子

病み上がり小鳥遊ばす春の庭

ぎつしりと小松菜の芽の列を成し

鳥の声にて目覚む朝木の芽時

埼玉

片渕 清子

キャビンよりみる朧月はや米寿

豪商の時代を写す雛人形

溪流の音と混はり散る桜

山の駅神なる桜立ち給ふ

中村 和江

春の朝社長も孫の運転手

蜆汁ネクタイしめるぎこちなさ

朧夜や魔の手を伸ばす未知の菌

松本 清川

かたくりの斜面谿へと続きけり

花冷えや激しき修羅の舞稽古

向江 醇子

きやうだいが集ふ彼岸の墓所

飼ひ犬の水入れに咲く落椿  
かほり良き酒くみかはし春惜しむ

# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句 十五句 赤木真理 //

\*選句は全て 品川鈴子

何故に旅する吾ぞ雲の峰

小田 知人

世界中を股にかける独り旅。長い月日を見知らぬ地に過ぐすと、何故これほど流離うのかと自問自答を繰り返す。そして本来独り生まれ独りで死ぬ人生そのものが旅だから、その所業は積み上げては崩れる峰雲の儚さにも似ることを実感する。

すみれ草重たい荷物降ろしたし

所 薫子

可憐に群れ咲くすみれを眺めるとふと安らぎ、いま抱えている重荷を置きたくなる。でもちよつと降ろしたとて、所詮はまた担うべき自分の荷で、きれいな重をいためるだけ。誰もが手にも心にもずつしりと荷を持っている筈。だから句を作るのかもしれない。

春寒しパイ皮のごともろき白骨

谷 楓

これは無常の極み。火葬にふされて変わり果てた肉親の骨は、嵩もなく触れば崩れる脆さ。遣り切れない悲しみを抑え、パイ皮の様だと写生した中七に脱帽する。仲良くパイなど作った姉妹かもしれない。

花疲れ風呂が沸いたと電子音

角谷美恵子

主婦の手を煩わす事なくボタン一つで適温のお風呂を沸かす近代的なバスルーム。あつという間にお湯が沸き、軽快な電子音が「お入りなさいな」と誘うように鳴る。お花見の混雑で疲れた体がほど良い湯かげんに癒され、花の余韻を心ゆくまで味あわれた事でしよう。(以下略)